

[原著論文]

ソーシャルワーカーを描いたフィクション作品に関する一考察 — 医療ソーシャルワーカーを描いたテレビドラマの事例検討 —

横山豊治

キーワード： ソーシャルワーカー像、医療ソーシャルワーカー

A Study of Fictional Works described the Social Worker — A case study of TV drama described the Social Worker in hospital —

Toyoharu Yokoyama, M.S.W., C.S.W.

Abstract

The television drama program that described the social worker as a chief character was done nationwide broadcasting of in 1992. It was the first time in my country. A similar program has not yet announced afterwards. I examined this fictional program from a technical viewpoint of a social work this time.

1 Positive evaluation

- 1) It tells about existence of a social worker for a lot of audiences.
- 2) It describes the reality of hospital management under a social insurance medical care system and works of the office work staff.
- 3) It describes that there is a difference in degree of understanding for adoption of a social worker.

2 Negative evaluation

- 1) A process of education to train a social worker is incorrect.
- 2) There is the scene causing big misunderstanding in a technical situation of a social worker and other medical care staff.

Key words: image of social worker, social worker in hospital

要旨

ソーシャルワーカーに焦点を当てて創作され、放映された連続テレビドラマである「天使のように生きてみたい」(1992年)の第1回放送分について、そこでのソーシャルワーカー像の描写の仕方をソーシャルワークの専門的視点から検討した。映像作品で一般に紹介されることが稀なソーシャルワーカーを主人公が目指す職種に設定し、この職種への関心を喚起している上に、厳しい経

営環境の中でも患者サービスの向上を図る目的からソーシャルワーカーを新たに雇用し、専門の相談室を開設するという病院の取り組みを描くことで、医療機関におけるこの職種の有用性も示唆していた。しかし、養成教育のプロセスが簡略化されており、志望者に求められる専門知識・技術とその習得に要する努力が極めて軽く扱われている上、ソーシャルワーカーと他の医療職が立脚する根本的な価値観・基本的理論に関して大

横山豊治 新潟医療福祉大学 社会福祉学部 社会福祉学科
[連絡先] 〒950-3198 新潟市島見町1398番地
TEL・FAX: 025-257-4470
E-mail: toyo-y@nuhw.ac.jp

きな誤解を招くセリフが主人公によって明言されており、適切さを欠いていた。

I はじめに

新しい対人援助専門職の職業イメージが社会の中でどのように認識されているかは、次の2つの理由から重要といえる。ひとつは専門的な援助を必要とする事態に直面した人々が、それをニーズに応じて利用できるようにするために、専門職が存在することおよびその主要な役割について市民としてあらかじめ知っていることが援助の利用、活用を可能にすると考えられるからであり、もうひとつはその専門職になることを志望し、養成教育を受けようとする者を確保し、援助の担い手に育てていく上で、進路選択の過渡期にあるティーンエイジャーが目標としうる職業群の中に、当該職種に関する情報が加えられている必要があるためである。

1987年の社会福祉士法及び介護福祉士法制定以後、「社会福祉士になるために」といったタイトルでその資格取得の方法や実践の分野などを紹介する出版物は多数刊行されるようになったが、警察官、消防士、美容師、保育士、教師、保育士、看護師、医師、弁護士などの職業に比べると、「ソーシャルワーカー」や「社会福祉士」という言葉に接する機会自体が日常生活の中では乏しく、この職業に対する一般的な認知度はかなり低いものと推定される。

例えば、保育士、教師、看護師、医師といった職業については実生活の中で直接接する経験を持ちやすく、職業イメージを抱きやすいし、実生活の中で直面する機会が一般的に多いといえない弁護士についてもこれまで数々の映画やテレビドラマを通じてその仕事ぶりが描かれているため、相当のイメージづくりが可能である。

一方それに対して、ソーシャルワーカーは誰もが成長の過程や日常生活で出会う職

業とはいえない上に、文芸作品やマスメディアに登場する機会も極めて少ないのが現状である。

そのような状況の中で、過去にソーシャルワーカーを主人公に描いた全国放送のテレビドラマがあり、フィクションによってソーシャルワーカー像を一般に知らしめる貴重な素材を提供した例がある。しかし、これまでにこのような映像作品について、ソーシャルワークの専門的な見地から検討された先行研究がなされていないため、今回、その中でソーシャルワーカーの職業像がどのように表現されているかを検討する。

II 目的

不特定多数の市民が視聴し得る全国放送のテレビ番組において、ソーシャルワーカーが登場するドラマの中でどのように描かれているかを、ソーシャルワークの専門的視点から分析し、伝えられる職業像の意義と問題点を明らかにする。

III 方法

調査対象である下記のテレビドラマを収録したビデオテープを視聴し、映像と音声によって表現されている「ソーシャルワーカー像」について、ソーシャルワークの視点から検討を加えた。

なお、今回の調査対象はあくまでもフィクション（創作）であるため、現実と比較したディテール表現の適切さについては論及を控え、ソーシャルワーカーの専門性に関わる部分に絞って検討することとした。

〈調査対象〉

TBS系全国放送の連続テレビドラマ「天使のように生きてみたい」第1回放送分
放送日時：

1992年7月3日（金）21：00～22：50

脚本：佐伯俊道

あらすじ：主人公の若い女性（以下、A

子とする)が街頭の献血車に立ち寄って献血をした際に、その車内に「MSW(医療ソーシャルワーカー)養成講座受講者募集」の張り紙が掲示してあるのを見つけ、その場で献血のボランティアスタッフとして働いていた同世代の女性(以下、B子とする)にその講座のことを尋ねたところ、B子自身がMSW志望者でその講座を受講中であったこともあり、MSWという仕事について聞かされ、講座の受講を勧められたことによって興味を持ち始め、その講座に通うようになる。

1年後、ある総合病院で若い院長の発案により「医療社会福祉相談室」が開設されることになり、その準備が始まっていた。院長の命を受けてスタッフ集めをしていた総婦長が、かつて同病院の看護師として働き現在は会社勤めをしながら大学夜間部の社会福祉学科に通っているC子にソーシャルワーカーへの就任を要請した他、MSW志望だったB子も採用されることになった。

ちょうどその頃、A子は自宅の近くに住み弟のように親しくしている少年がその病院に入院したことを契機に、同病院に出入りするようになり、そこで医療社会福祉相談室が開設されること、さらにMSWのことを自分に教えてくれたB子がそのスタッフとして採用されたことを知り、「自分もMSWとして採用してほしい」と病院側にアピールした。

その折、白血病で入院していた少女(前出の少年と懇意)が無断離院し行方不明になるというハプニングが生じ、「ソーシャルワーカー見習い」のような身分で患者探しに協力するよう病院から要請され、患者探しに奔走する。

IV 結果

1 肯定的に評価される点

1) 「ソーシャルワーカー」という職種の存在を伝えている

病院を舞台にしたテレビドラマは多数制作され、放送されてきたが、中心的に描かれる職種はほとんどの場合、医師、看護職であり、ソーシャルワーカーを登場させること自体が稀有であるにもかかわらず、これを主人公として描いた点が非常に画期的といえる。そのような映像作品の放送はこれが初めてであり、その後10年余りを経過した今日においても同様の作品は登場していない。普段、マスメディアに露出することが少ない「ソーシャルワーカー」という職業があることを全国放送で視聴者に知ってもらえた意義は深い。

放送時間も放送業界でいう「ゴールデンタイム」から「プライムタイム」にさしかかる午後9時台ということで、多くの一般家庭で視聴しやすい時間帯である上に、3ヶ月にわたって毎週放送される全13話の連続ドラマとして制作されたため、単発の番組に比べて視聴できる機会も多い。キャストに田中美奈子、中嶋朋子、石黒賢、山下真司という若い世代に知名度の高い俳優を起用したことも、職業選択を考えるような世代にあたる当時のティーンエイジャーの関心呼びやすい番組であったことが伺われる。

番組の冒頭で本編が始まる前に「MSW—医療ソーシャルワーカー—とは」と題した文字情報だけの静止画面が現れ、このドラマがMSWに焦点を当ててつくられている

表1 ドラマの冒頭に表示されるMSWの説明

MSW—医療ソーシャルワーカー—とは 病気や障害に関連して起こる患者たちの 生活上の問題の解決を援助する専門の相談員 である。
--

ことを知らしめ、一般の視聴者にはなじみが薄いであろうその職名の意味を簡潔に説明してまず基本的な理解を促そうとしている点も高く評価できる。そしてその説明文の表現は非常にシンプルだが、MSWのことを一般向けに説明するごく手短な文章としては大きな過不足はなく、簡明にして適切な定義づけをしているといえる。

2) 保険医療制度のもとでの病院経営の実態と事務職員の働きを描いている

病院事務局内の場面で、診療報酬の部分的な水増し請求を容認しようとする事務局長と医事課長に対して毅然と反対する実直な事務職員の姿が描かれており、両者の対立の背景に病院経営の厳しい実情があることを伺わせるひと幕となっている。やり取りの中で、レセプト（診療報酬請求明細書）の「個別審査」といった業界用語も用いられており、保険診療という制度の枠組みに基づいて病院経営を行う際に、書類審査をパスする必要がある、その網の目をくぐり抜けられる範囲で、最大限の収入を得ようと画策する病院側の思惑があることを示唆している。

病院を舞台にした小説やテレビドラマ、映画などのフィクション作品では多くの場合、病棟や診察室、手術室、医局、院長室などでの人間模様が中心に描かれており、医師、看護職、患者、家族らの動きを追う展開となるのが通例だが、ここでは事務部門でのやり取りが度々登場し、こうしたいわば病院の舞台裏ともいえる診療報酬請求事務の一端を暴露するのは珍しい。医療・看護職らの専門的な働きを支える事務方の存在が病院には欠かせないことを印象づけ、さらに保険医療制度のもとにわが国の病院経営と種々の診療活動が成り立っていることを知らしめているという点で積極的に評価できる場面といえる。

また、このドラマでは病院経営の改革を担うコンサルタントが院長の意向で採用され、事務局の隣りに設けられた「経営企画室」に配属されている。アメリカの大学で病院管理学等を学んできたというその青年は、患者サービスの向上という観点からソーシャルワーク部門の設置にも理解があり、院長命で「医療社会福祉相談室」の開設準備を進める総婦長の協力者として描かれている。しかし、彼の進歩的な動きは、自分達のやり方で長年病院経営を支えてきたという自負を持つ事務局長、医事課長ら事務系管理職の“守旧派”との軋轢を生み、しばしば衝突する。

この番組が制作、放送された1990年代初頭は、政府の医療費抑制政策を受け、多くの病院が様々な経営努力を余儀なくされていた時期で（そしてそれは今も一層厳しさを増して続いているが）、中には専門のコンサルティング会社から点検を受け、改善策の立案を求めるといった例も見られた。わが国ではその働きが診療報酬にほとんど直接結びつかず、「不採算部門」などと呼ばれることもあるソーシャルワーク部門を、新たに専任スタッフを雇って開設しようというこの病院の積極策が、経営全体を見直し、改革しようという院長方針のもとに推進されているものであることがわかるような人物設定だが、病院での患者サービスのあり方を含めて、病院の管理運営方法が点検と改善を求められる状況に置かれているという現実を踏まえているものと評価できる。

3) MSW 配置に対する理解度に格差が存在する様を描いている

他の医療職のような国家資格制度が確立していない医療ソーシャルワーカー（MSW）については現実の医療関係者の間でも理解の度合いが様々である上に、前述の通り、その働きが診療報酬でほとんど評価されて

いないこともあって、従来専任の人員配置をしていなかった病院が新規にその専任者を雇い入れるということはその病院にとって大きな変化であり、採用後も周囲の理解が必ずしも十分でないことから、業務が軌道に乗るまでには種々の困難が伴うことは想像に難くない。このドラマでは、MSWの新規採用を伴う医療社会福祉相談室開設に対して冷ややかな視線を送る勤務医や事務職員らの姿も描かれており、新しい職種を取り巻く職場環境の厳しさが表現されているところにリアリティが感じられる。

娯楽作品であるため、主人公に協力的な立場の人々（善玉）に対して、対立的な関係にある人々（悪玉）も登場させ、両者の対立を軸にストーリーを展開させるというパターンがここでも用いられていると見なければならぬが、社会的認知が他の専門職ほど高くないMSWの置かれている雇用情勢の厳しさを正しく伝えるという意味で、むしろこの中で描かれている程度の「船出の厳しさ」は現実的といえよう。

2 否定的に評価される点

1) ソーシャルワーカーを養成する専門教育のプロセスが正確に伝えられていない

このドラマでは「MSW志望の主人公たち」と「病院改革の一環として初めてMSWを採用する病院」とが結びつくプロセスを、他のハプニングと絡ませながら描いているが、MSW志望のふたりがどのような基礎教育と専門教育を受けてきたかといえ、はっきりわかるのは夜間、市中で開講されている「MSW養成講座」に1年間通ったということだけである。

ふたりは何件かの病院に履歴書を持って回り、MSWとしての採用を求めて就職活動をした末に、ドラマの舞台となる病院にたどりついた—という設定だが、主人公は一般企業の会社員から転職を図ろうとしてい

る。主人公にこの職種を目指すきっかけを与えた「MSW養成講座」のポスターは画面に2秒程度アップで映し出されたが、そこに記されていたのは表2の通りであり、講座の内容や受講要件がどのようなものであったかは伺い知れない。

ふたりがそれ以前にどのような学歴やバックグラウンドを持つのかは不明だが、結果的に、社会人向けの1年間の講習を受けただけでMSWとして就職するという展開で描かれている。全体を通じて「社会福祉士」という国家資格の名称も全く登場していない。

この番組が放送された1992年は、社会福祉士及び介護福祉士法が施行されて既に4年が経過しており、社会福祉系学部・学科・専攻を持つ大学・学校が全国に約70校以上は存在していた¹⁾。

医療分野のソーシャルワーカーを目指す者であれば、そうした社会福祉専門教育の課程を備えた教育機関で学ぶことが既に一般的となっており、大学卒業者や社会人向けの1年間のソーシャルワーク教育課程を持つ専門教育機関という点では国立公衆衛生院（当時）と日本社会事業学校研究科が当時から実在するものの、いずれも全日制であるため、会社員を続けながらの通学は不可能である。夜間課程を持つ福祉系大学・専門学校もあるが、このドラマではそのような教育機関に在籍したという設定にはなっていない。

現任者向けの研修会は多々あるものの、専門教育のバックグラウンドがない者を1年間でMSWに「養成」という現実に存在しない講座の設定自体が誤っており、「あなたもMSWになってみませんか!!」というキャッチフレーズでその受講者を募るとするのは、専門職養成の観点からみて誤解を招き、ソーシャルワーカーの職責や専門性に照らしてその職業イメージを実態よりも大幅に軽いものと視聴者に印象づけてし

表2 ドラマの中で表示される「MSW養成講座」のポスター

<p>あなたもMSW（医療ソーシャルワーカー）になってみませんか!!</p> <p>MSW 養成講座受講者大募集</p> <p>講 師：佐々木哲子 ところ：世田谷研修センター</p> <p>あなたの熱いハートを仕事で生かせるチャンスです。 やる気のある人、あつまれ!!</p>

まう。ストーリー上も、ドラマの出発点で主人公が職業選択の契機とする重要な場面であるだけに、適切さを欠いた情報提供となっており、その悪影響は大である。

2) ソーシャルワーカーと医療職の専門的立場について大きな誤解を招く発言がある

番組の後半で、主人公が病院の医局で医師や他の職員らに向かって自分がソーシャルワーカー志望者であることを力説する際に「医者は医療、ナースは看護、ソーシャルワーカーは患者のことを第一に考える」と強い口調で発言した場面がある。これはこのドラマにおける看過できない重大な過ちといわねばならない。

医師は医療の専門的な知識と技術を用いて患者の健康回復に寄与しようとしており、看護職は看護の専門的な知識と技術を用いて患者の健康回復と療養生活に寄与しようとしているのであって、医療も看護も患者のために行われているものである。上記の発言は「患者のことを第一に考えない医療や看護」と言っているのに等しく、「ソーシャルワーカーこそが他の職種と違って患者のことを最優先に尊重している」というまさに唯我独尊の境地を示している。これは、主人公が専門的な医療ソーシャルワークの理論を学んでいないことを証明しており、他職種から反発を招き、ソーシャルワーカーの

役割に対する理解と協働関係の構築を妨げる結果を生じることとなる。

演出上、気負い立つ主人公が自分の役割を強調するあまり、思い上がった言動を示し、その行き過ぎを周囲から戒められたり、反省させられたりして本来の職分を自覚し、他職種をも尊重する姿勢に転ずる…といった展開を見せるのであればともかく、この作品では彼女のこの誤った信念に基づく発言に対して打ち消しや修正を加えるような展開が見られない。その点がこの作品の専門的な評価を著しく低めることになる。

対人援助専門職は、しばしば援助対象者の抱える問題を自分の手で解決しなければという使命感が高じ、専門家にはまたそれがいつでも可能であるかのようなある種の万能感や全能感といった非現実的な感覚を抱く恐れがあるという問題があり、特にソーシャルワークの技法上はそうした感覚に自らの援助実践が拘束されないように留意しなければならないとされている^{2) 3)}。

また、ソーシャルワーカーに求められる倫理の中には、的確に意思やニーズを表明できないクライアントの権利を擁護し、必要に応じて「代弁者 (advocator)」の機能を担うという役割もあることがソーシャルワークの専門教育の中では教えられているが、ソーシャルワーカーは、あくまでもクライアントの社会的な側面を専門的に担当し、生活者としての自立・自律や自己実現を支援していく対人援助専門職であり、その立場から「患者のことを第一に考える」のが使命である⁴⁾。

しかし、医師や看護職もそれぞれの専門的な立場から「患者のことを第一に考え」ているのであって、医療の現場で対人援助に携わる複数の職種の間でその基本的なスタンスに差があるわけではない。他方、ソーシャルワーカーは患者の医学的、看護学的側面に関しては専門家ではなく、それらの

側面に関してはそれぞれの専門職との間で分業し、医療チームのメンバーとして、「患者のために」互いに協力し合う必要がある。「全人的医療」の重要性は、ひとりソーシャルワーカーだけが認識しているのではなく、他の医療従事者にも共有されているべきである。したがって、このような発言をソーシャルワーカーたらんとする者が行うことは甚だ不勉強であり、不遜・独善とのそしりを免れない。

多くの職種が協働して目的を遂行しようとするチーム医療、チームケアの現場においては、専門的視点が異なるがゆえの議論は当然生じ得るし、現実には各々の専門性を強調するあまり職種間での軋轢がないわけではなく、この他に病院を舞台にしたドラマ、映画等のフィクション作品でも演出上、治療方針をめぐるスタッフ間の論争や対立関係が誇張される場面などが散見されるが、本作品における前述の発言は、社会的認知度の低いソーシャルワーカーの本来的な役割や専門性が誤って伝えられるメッセージを含んでいるため、きわめて不適切である。

V 考察

今回取り上げた作品は、医療分野のソーシャルワーカーに焦点をあて、それまでMSWを雇用していなかった病院が、患者サービス向上のための方策として新規に採用し、「医療社会福祉相談室」を開設するまでの経緯と、この職業を目指して就職活動に取り組む若者の姿を中心に描いているという点で本邦初のテレビドラマであり、一般的な知名度が低いソーシャルワーカーという対人援助専門職の存在を全国放送で視聴者に知らしめた意義は高く評価される。

その反面、ソーシャルワーカー養成の専門教育のプロセスが十分描かれておらず、主人公のように熱意さえあれば1年間の夜

間開講講座を受講して就労が可能になる職種なのだ、という理解を一般視聴者に与えてしまうストーリー展開になっているという誤りがあり、ソーシャルワーカーの専門性が過小評価されている。

ただこの点は、福祉系大学・専門学校等を経て社会福祉士資格を取得して現場に出るという現実のオーソドックスなコースからすると簡単過ぎる描き方ではあるものの、少なくとも医療分野に限っていえば、医師や看護職のようなソーシャルワーカーの必置制度や配置基準がなく、実際にMSW業務を行う上での資格要件（例えば社会福祉士を任用するなど）を定めた法令もないため、このドラマのような形の採用や就労の仕方を制度上は否定することができない。全体の中で多数派ではないものの、MSWとして実際に働いている者の中には、社会福祉専門教育を受けたことのない看護師長経験者が従事しているケースや、高等学校卒業後、病院に事務職として採用された者がベテラン職員になってMSWのポストに移るといったケースも含まれていた。（このドラマはその意味で、MSWを取り巻く制度的な位置づけの未確立や資格要件の不備という“法の隙間”を鋭く突いているともいえるが、最近では「社会福祉士または社会福祉士受験資格」を採用条件とするのが、一般化しつつある）

したがって、このように描かれる素地が未だに存在する現実の方を問題視する必要もある。2003年に創立50周年に至ったMSWの全国組織、(社)日本医療社会事業協会は、多年に渡ってMSWの資格制度化を求めて運動してきたが、ソーシャルワーカーの国家資格制度は社会福祉士法や精神保健福祉士法が一般医科の医療分野を避けるような形で制定されており、実効性のある資格制度化はまだ実現をみていないのである⁵⁾。

また、このドラマの最大の問題点は、ソー

シャルワーカーだけが患者のことを第一に考えて行動し、他の職種はそうした職業的価値規範に立脚しておらず、患者の存在を後回しにした医療や看護を実践しているかのような言動を主人公にさせ、極めて自己中心的な職業像を提示したまま修正を加えていないことであった。

この主人公のセリフについて、ドラマを小説化(ノベライズ)して放送とほぼ同時期に出版された単行本『天使のように生きてみたい』(佐伯俊道著、1992年、徳間書店)では、「ドクターは医療、ナースは看護、ソーシャルワーカーは患者さんのことを第一に考える。私、そう習いました」と記されており、テレビドラマよりもさらに不穏当なひと言が加わっている⁶⁾。主人公たちが受講した「MSW養成講座」の中で、このような誤った価値観や職業観を教え込む教育が施されていたことを示唆しており、専門職として未熟な若い主人公が医療への個人的な潜入観から勢い余って発した「失言」ではないということになるからである。

ドラマの脚本家でもある同書の著者は、中島さつきの『医療ソーシャルワーク』(誠信書房、1975)や前田ケイ監修による『保健医療の専門ソーシャルワーク』(中央法規、1991)など、この分野の代表的な専門書を参考文献に挙げており、ドラマ化に関しても「日本医療社会事業協会のみなさん」の協力を得た旨、同書の巻末に記し、謝辞を述べている。⁷⁾

既に制作から10年以上が経過しており、どのような経緯でこの作者にそうした誤解がもたらされたのかは判然としないが、この種の取材を受ける際に関係者には専門的知識の乏しいインタビューアーに対して十分慎重な表現方法を取り、的確な説明が求められるのはいうまでもない。また、仮に当時取材を受けた同協会関係者の中で、このような考え方に立脚してソーシャルワ

ーカー像を伝えた者がいたとすればその責任は相当重いと見える。

ただ、残念ながら、社会福祉やソーシャルワークの専門家の中にこのような発言を誘発しかねない医療観を持論とし、医師が患者の全人的な健康回復に関心をもって働いていないかのような言説を主張するという例も現実にはないわけではない。ちょうどこのドラマが準備され、制作されていたと思われる時期にも、例えば、アキイエ・ヘンリー・ニノミヤが1991年11月に開催された「第3回社会福祉士全国研究集会」で「ソーシャルワーカーのアイデンティティ」と題した講演を行い、その中で医学モデルや医療モデルを批判的にとらえて次のように述べている。

「医療では横の連携は非常に難しいのです。お互いに医師が連携していませんから、バラバラにやっております。ですから、全体を見ると非常に間違った結果になっていることも往々にしてあります。専門分化となりますと自分の専門以外は何も知りません。うんと難しいです」⁸⁾

診療科ごとのセクショナリズムは他の組織同様、現実に多少なりとも存在するとしても、個々の診療活動の中で多くの医師は必要に応じて他の専門分野の医師にも紹介や照会を行い、多角的な所見を集めて最良の医療サービスに努めており、その過程でコ・メディカルスタッフとも連携、協力をしているという現代医療の実態を見誤った見解といえる。

当時は、MSWの資格制度問題をめぐって様々な議論が活発に交わされていた時期であることから、ヒューマニティを尊重する社会福祉の専門性や価値基盤を強調する余り、医学・医療との違いをことさら強調し、「医師は病気を見て人を見ない」というような極端に偏った医療観を持ち出す論調もあったため、ソーシャルワークの専門教育に携

わっていた小松源助は、同年、淑徳大学で催されたシンポジウム「福祉の中における医学とその教育」のシンポジストとして次のように述べて、医学モデルのとらえ方を誤らないよう注意を促している⁹⁾。

「社会福祉実践の中では、『医学モデルあるいは医学疾病モデルに対する反省・批判』という形で取り上げられたりもしてきております。(…筆者中略…) その場合に注意しなければいけないのは、医学疾病モデルという場合に、それは近代医学のあり方を指しているわけで、現代医学までを含めてのものではないということをしちんとさせていかなければならないのではないかと考えております。近代医学と現代医学とをそれぞれ区別して、この辺のところを検討していかないと、誤った見方になる可能性があるのではないかと私は考えております。」¹⁰⁾

こうした当時の議論の経緯をふまえると、今回取り上げたドラマの中にはソーシャルワークと医療との関係に関わる極めて重要な論点が含まれているということがわかる。

その意味で、ソーシャルワークの研究・教育・実践に携わる者には、その基本的価値観や専門性が的確に映像作品に表現されるようつくり手側に伝え、放送というマスメディアを通じてソーシャルワーカーが担う社会的な役割や存在意義を正しく広報してもらえるような素材を提供していく責任があることを示唆した作品ともいえるのである。

VI おわりに

今回取り上げたのは「医療ソーシャルワーカーを主人公として描いたテレビドラマ」の事例であったが、1982年にこの職種を主人公にした漫画が女性向け漫画雑誌に連載されたことがあり、全7話が1冊の単行本にまとめられて刊行された例がある¹¹⁾。しかし、専門書よりも多くの読者を持つ一般的なメ

ディアで、このようにフィクションの主要人物としてソーシャルワーカーが描かれることは極めて稀である。

筆者は2003年に著した『成長するソーシャルワーカー ～11人のキャリアと人生～』(保正友子ほか共著、筒井書房)の中で、他のヒューマンサービスに比べて、ソーシャルワーカーを題材にした文芸作品や映画、テレビドラマなどが非常に乏しく、一般の人々に職業像をイメージさせる機会が少ないことを指摘し、多様な媒体でその職業像が描かれることが社会的な認知度を高めることにつながると提言したが、マスメディアに乗るフィクション作品には、専門的見地からみれば不適切な省略や脚色がなされたり、議論の余地のある微妙な問題が一面的に取り上げられるなど、事実にとぐわらない理解を全国に広めてしまう危険性もあることを示したのが今回のテレビドラマの事例であり、今後への教訓として学び取るべき点を見過ごしてはならないと考えている¹²⁾。

日本社会福祉士会、日本医療社会事業協会などの職能団体には、公に発表されるフィクション作品について、ソーシャルワーカー像やその専門性にかかわる表現の適切さに注意を払い、誤解を防いだり、改めたりするための活動を組織的な機能の一部として担いながら、それらが正しく市民に伝えられるよう専門的見地から作品を監修し、協力していく役割が求められるといえよう。

文献

- 1) 一番ヶ瀬康子, 大友信勝, 日本社会事業学校連盟: 戦後社会福祉教育の五十年, ミネルヴァ書房, p382, 1998.
- 2) 尾崎新: ケースワークの臨床技法, 誠信書房, pp142-143, 1994.
- 3) 尾崎新: 対人援助の技法, 誠信書房, pp13-19, 1997.
- 4) 福祉士養成講座編集委員会: 新版社会

福祉士養成講座⑧社会福祉援助技術論
I。中央法規。pp42-45, 2001.

- 5) 50周年記念誌編集委員会：日本の医療ソーシャルワーク史 - 日本医療社会事業協会の50年 -。日本医療社会事業協会。pp54-92, 2003.
- 6) 佐伯俊道：天使のように生きてみたい，徳間書店。p66, 1992.
- 7) 前掲書，徳間書店。p254, 1992.
- 8) アキイエ・ヘンリー・ニノミヤ：ソーシャルワーカーのアイデンティティ，第3回社会福祉士全国研究集会報告集。pp16-17, 1992.
- 9) 横山豊治：医療ソーシャルワーカーの資格制度問題をめぐって，医療ソーシャルワーク，22，静岡県医療ソーシャルワーカー協会。pp17-23, 1994.
- 10) 小松源助：ソーシャルワーク研究教育への道。pp236-237, 1993.
- 11) 冴木奈緒作，小川 亨監修：M.S.W メディカルソーシャルワーカー。小学館。1982.
- 12) 保正友子，竹沢昌子，横山豊治ら：成長するソーシャルワーカー - 11人のキャリアと人生 -。筒井書房。pp180-182, 2003.